

2021年6月5日
新庄市エコロジーガーデン

新庄市エコロジーガーデンの保存活用 と 歴史まちづくり法の活用

工学院大学 理事長・教授
後藤 治



皆さんお早うございます。学校法人工学院大学理事長の後藤です。もともと建築の教員で、今日は建築の専門家としての話となります。本学は、新庄市など日本の地方都市の立場と似ているところがあります。少子化で子供が減る中、大学というのは一番成長しない産業で、生き残りをかけた戦いをしています。この点、日本の地方都市と一緒にです。こんな視点からお話しをさせていただければと思います。

去年、新庄市民プラザで、ここと同じ国登録文化財である雪調（※旧農林省積雪地方農村経済調査所）の保存活用と可能性の話をさせていただきました。そのとき、新庄市の歴史まちづくりについて、拠点となりそうな場所が結構あり、その拠点を磨いていくべきではないかという話をしました。

エコロジーガーデンに関して言えば、周辺に戸澤家の霊屋とか、たくさんのお寺があります。都市の近くでコンクリートを張っていない川を探すのはかなり大変ですが、自然のままの川もあります。こうした良い要素がエコロジーガーデンの周りに沢山あるので、それらを巻き込んで拠点を作っていかねばいけないということ、また雪の里情報館の周辺には、新庄城跡や公共施設、公園があって、それも磨けばもっと光るんじゃないかという話をしました。さらに万場町界隈などもつないで、拠点内を歩いて楽しむ、時間を費やす、そういう街にならないとだめだという話をしました。場と場をつなぐと歩くのが大変なこともありますから、たとえばエコロジーガーデンから城跡まで車を使うことも当然あると思います。先ほど市長さんは自転車でも来られていましたが、新庄市は割と平らなので自転車も使えるだろうし、これからの時代、スマートモビリティの導入も考えられます。自動運転や、ぶつかっても事故が起きないような乗り物の開発が進んでいます。新庄市は平らなので、坂が多い東京よりそういうものを導入するのに向いていますね。あと、新庄は夜の街歩きもでき、これも忘れちゃいけませんね。最近コロナでできないかもしれませんが。

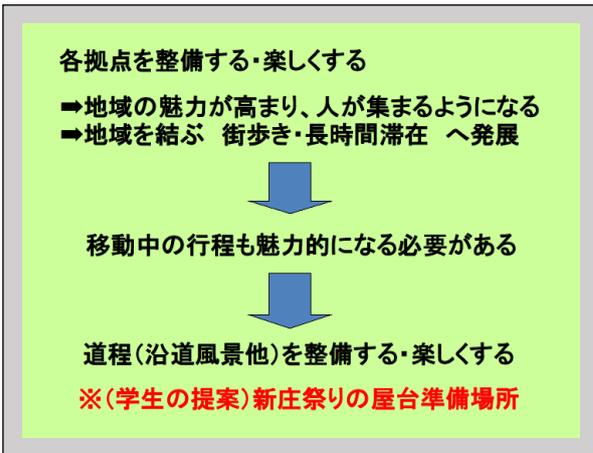
新庄市の歴史まちづくりに向けて

新庄市の拠点となる場・なりそうな場
エコロジーガーデン＋周辺（戸沢家墓所を含む）
雪の里情報館（＋周辺）
新庄城跡＋周辺の公共施設・公園他
＋ 万場町界隈 etc.

＋ 場をつなぎ街を（歩いて）楽しむ

＋ 夜の街歩き / あけぼの町

このように各拠点を整備して楽しくすることが大事ですが、こういうことをやると地域の魅力が高まって人が集まるようになり、地域を結ぶことで街歩きや長時間滞在に発展していきます。これが地域の活力と元気につながり、もしかすると雇用創出につながっていくかもしれません。また、移動中の行程も魅力的になる必要がありますが、例えばスマートモビリティの導入はそういうことにつながるかもしれません。また、移動中の風景も魅力的にならなくてはいけません。ここに来るときにいつも思うので



ミニ知識

歴史まちづくり法(歴まち法)
(地域の歴史的風致の維持及び向上に関する法律)

市区町村が歴史的風致維持向上計画を策定
重点区域内での計画実施に国が支援

※街なみ環境整備事業、都市再生整備交付金他
重点区域内で歴史的風致形成建造物の指定
歴史的風致維持向上支援法人の指定

要件 国指定の建造物
※ 国宝・重要文化財・史跡他
国選定の重要伝統的建造物群保存地区
要件の周辺に重点区域を設定

そして、重点区域というのを設定すると、この計画に書かれた内容の実施に対し、国が支援してくれます。街並環境整備事業や都市再生整備交付金など、いくつか活用できる事業があり、これらの事業は歴まちをやらなくても活用できますが、歴まちをやることにより、事業の採択率がぐんとあがります。また交付率が上がる場合もあり、やらない手はありません。国指定の建造物の周りに重点区域を設定しなければならないので、全ての市町村ができるわけではありませんが、新庄市にはそれらがあります。また、歴史的風致というのは、この歴まち法では「地域における固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されています。簡単に言えば「地域古来の風景と営み」ということで、これが50年以上継続していることも要件になっています。新庄市については、営みは新庄まつりがあるから楽勝ですね。50年なんてもんじゃない。新庄の城下と新庄藩のエリア、新庄まつりだけでもばっちりいけます。もう新庄のためにあるような法律じゃないのと言いたいところです。雪調の時にも言ったんですが、登録文化財のエコロジーガーデンと雪調だけじゃなくて、国指定重要文化財の建造物の鳥越八幡神社、旧矢作家住宅があって、戸澤家の墓所が国指定史跡になっています。それから私も知らなかったのですが、国指定名勝もあるんですね。これらをコアに重点区域を設定していけば、歴まちが導入できるわけで、条件はそろっているということです。

が、国道を通ってくるとつまらないですね、ロードサイドショップばかりで。一方、羽州街道を通ってくると、伝統的な古民家状の家があったり、焼きそば屋さんがあったり、いい感じですね。やっぱり、来る行程もわくわくするようなものがないといけないと思います。そう考えると、道程を整備する、楽しくすることも必要です。新庄まつりの山車制作は、みなさん小屋の中で一生懸命やっていますが、「道程を楽しむためにもっと見える化した方がいいんじゃないか、お祭りの準備をしていること自体が観光の要素なんじゃないか」、そういうことを本学学生が言っていました。なるほどなと思って聞いていましたが、そうすると新庄の街中に観光の拠点が広がって、それを見ながら街歩きするなんてこともできるかもしれない。さすが学生は目がフレッシュだと思いました。

こういうことを進めるためには一定のルールなり計画が必要で、その実現のための計画なりツールが歴史まちづくり法ということになります。前回の10月の講演の折に、歴まち法といういい法律がありますので新庄市でもぜひ検討してみたいかかと話をしたところ、さっそく着手頂き、非常に素晴らしい動きにつながっていると思う次第です。この歴まち法は、まず市町村が歴史的風致維持向上計画というのを作りますが、大事なのは「向上」という言葉で、古い建物を単に維持するんじゃないで、良くするという、向上させるということが大事です。

「歴史的風致」とは？

地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動とその活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境
(法第1条)

|||

地域古来の風景(建造物+周辺環境)+営み

※現在まで50年以上の継続が条件

ここからは、昨日議員さん向けにも話した内容ですが、市民の皆さんの前でもう一度させて頂こうと思います。歴まち法を導入して、エコロジーガーデンの将来像に向けた整備をしていくという話をすると、「なぜエコロジーガーデンなのか。3棟も改修したからもういいじゃないか」という反応があると思います。また、こういう歴史保存の専門をやっていると、いろいろなところで街並保存に関わりますが、やっぱり最初の反応は「先生の言うこともわかる、歴史文化も大切だ。でもうちの市はもう予算が無く、福祉や子育てで優先で、歴史文化に回すお金が殆どないんですよ」というものです。これに対して、私は反論したいわけです。新庄市はさらに追加で「新庄市の歴史文化は新庄まつりでもう十分。他はもういいじゃないか」と、こういう市民の方もいるのではないかなと思うんですね。これも私はノーだと言いたいです。新庄まつりがノーだと言っているわけではなく、新庄まつりはあるけれど、やっぱり歴史文化をもっと磨くことが大事だという話をさせていただこうと思うわけです。

歴史・文化がなぜ大切か？
 地域の誇り、Identity
 → Uターン・Iターン
 → 例)新庄祭りの時には地元に戻る

歴史文化 VS. 福祉・子育て
 福祉・子育てへの投資
 → 例)病院建設、運動場整備、修学支援金等
 → 地方自治体の財政を圧迫
 → 病院や運動場で人はUターン・Iターンするか？
 → 老人・子供が暮らしやすい町とは？

→ 新庄祭りは、老人・子供を元気にしているのでは？
 → 地域古来の豊かな暮らしが福祉・子育てに
 → 例)子育て 運動場<山・川・海

私は、福祉子育てより歴史文化だと思っているので、スライドでは「VS」と記載しています。何故歴史文化が大切かというと、地域の誇りなりアイデンティティに繋がるからです。オリジナリティとも言えます。それが何故大事かというと、人口が減って、UターンとかIターンとかでなるべく新庄市に住んでもらいたい、人を減らしたくない、これを実現するための源泉だからです。やっぱりふるさとへの愛着が源泉なのです。ここに住みたいと思わせるためには、やっぱり歴史文化はとても大切で、誇りを持ってないところに人は住んでくれません。その一番いい例が、新庄まつりのときにみんな帰ってくることではないでしょうか。やっぱりそれは歴史文化に愛着が

あるから、みんな忘れないで帰ってくるわけです。ふるさとが嫌で出ていった人は帰ってこないです。私の親戚なんかそうですけどね。母親の地元が愛媛なのですが、嫌で出ていった人は帰らないですよ。それを思うと、毎年お祭りの時に帰るとい人があるだけでも、新庄は勝組というか、まだ地域に脈があるという状況ですね。

一方、福祉子育て、これ大事だと言っている人たちがどういうことに投資しているかというと、病院や運動場整備などに投資しています。新庄市は運のいいことに県の病院がありますが、また東京都では、最近就学支援金という、大学生の学費の一部を出してくれる制度をやってくれています。まあ大学の経営者という立場ではもっと出してくれたいなことを言っていますが、個人的な本音で言うと、そんなことやっていいのかよと言いたくなるんですね。何故かかというと、これ「出」ばかりで「入」がないからです。就学支援金は、ふるさとへの愛着を持ち続け、偉くなって稼いでくれて、最後にごんと寄付金で返してくれたりすればいいですが、そういうことに繋がらないと「出」ばかり。私は今、大学経営していますが、「出」ばかりではだめですね。やっぱり「入」が無いと成り立たないですから。福祉や子育てで要求されるほとんどは「出」ばかりのことが多く、「入」に繋がらない。病院や運動場で人はUターン、Iターンするか。これ個人の立場で考えれば、隣の街で作ったのを使わせてもらえばそれでよく、全部の自治体がこういう大きいものをそろえる必要は無い。バランスよく配置されていれば良くて、競って作る必要はないのです。別の言い方をすると、そもそも老人や子供が暮らしやすい街って何だろうと考えて欲しいですね。病院が立派だから暮らしやすいのか、運動場が立派だから暮らしやすいのか。それが先ほど言った地域の誇りとかUターン、Iターンに繋がるのでしょうか。病院が立派な街だからふるさとに帰りますか。新庄まつりと比べてみてください。立派な病院、立派な運動場はどこにでもあり、個性ではないのです。こう考えるとやっぱり新庄まつりの方がよっぽど子供や老人を元気にしているんじゃないか、と言いたいわけです。お祭りの時に、おじいちゃんが孫に、こうしなくちゃいけないと元気よく教える、これだけで病院行かないで元気になるわけです。それで子供は、新庄まつりを楽しみ、愛着持って帰ってくる。これを考えると、福祉や子育てを進めるより、お祭りで盛り上がっている方が、リターンが十分にあって健全ですよ。

さらにはお祭りに限らず、地域古来の豊かな暮らしというのが本来、福祉や子育てにつながっているんじゃないですかとい

うことです。私の大学の先輩に病院建築の大家である長澤泰（やすし）先生がいます。先生が定年になる頃にしきりに言われていたのは、「これからは病院はいらない。病院に行かなくてよくなる所を作らなくてはいけない。健康な人が健康であるためにいくところが病院のはずだから、病院っていう言い方もだめで、健院の方がいい。とにかく病気になることが重要だ」ということでした。それを考えると子育てには、例えば運動場よりも、こういう地方の場合だったら山とか川とか海の方がいいんじゃないか、こういう所で遊んでいる子供の方がずっと健全だし、ふるさとの山や川が良かったから将来戻るんじゃないですか、と感じます。地域に人が戻ってくる、居着く理由をきちんと考えなくてはいけないと思うわけです。そのキーワードが、歴史、文化、自然の3つだと思います。知り合いのデービッド・アトキンソンという人もいつもそう言っています。

**少子化・高齢化の時代
地方に必要なのは？**

- ➡ 交流人口の増加
- ➡ 観光への注目

**地域の観光のために大事なものは？
拠点施設？ 名産品？**

- ➡ 観光客が2回来るか？
 - ➡ **リピーターを呼ぶ・呼べる観光**
 - ※滞在時間が長い観光 / 宿泊するか？
 - ➡ **ハード + ソフト 両者をそろえる**
 - 例)「老舗」で「そば」を食べる

さて、少子高齢化の時代、地方に必要なものは何かというと、政府も言っているように交流人口を増加させることです。そして、交流人口を増加させるためには観光が大事であり、デービッド・アトキンソンなどは、数少ない成長産業は観光であると言っています。コロナの前は実際にそうでした。インバウンド誘致でどんどんお客さんが増えて、観光は成長産業でした。今は一時停滞していますが、星野リゾートの星野さんも、これが一段落すると観光はまた右肩上がりになると言っていますから、魅力的な施設、人を受け入れられるようなところに投資するのは決して無駄にはならないはずです。

地域の観光にとって大事なものは何かと考えると、すぐに拠点施設とか名産品が挙がります。例えば道の駅があると人が大勢来てくれるなどという話が出てきます。でもそれだけではだめです。何故かという、一回来たら終わりになるから。大事なのはリピーターで、何回も何回も来てもらわなければいけない。観光客が2回来てくれる施設にならなければいけない。2回来てくれる施設がどんなものなのか個人に置き換えて言うと、ある場所に行ったあと、友達を連れてもう一回行こうと思う施設なのかどうかです。エコロジーガーデンは、そういう意味で結構いい線いっていると思います。1回来て、1回見たからもういいやじゃなくて、友達つれてもう1回行こうと、そういう感じに見える。やっぱりこういうリピーターを呼べる観光じゃないと、交流人口の増加には役に立たないということになります。もう一つ、交流人口増加のためには、滞在時間をより長くすることが大事だと言われています。エコロジーガーデンの場合は、リピーターまでは呼べていますが、カフェに来たときやキトキトマルシェのときなどのほかは、まだまだ工夫の余地があると思います。宿泊するのが滞在時間を延ばす一番いい例なのですが、宿泊するところまで行かかっていうと、もう少しですね。そろそろ泊まる人も出てくるかなという感じです。

これらを考えるときにキーワードになるのは、ハードとソフトの両者をそろえるということです。先述した「街中環境と営み」のように、ハードとソフトがそろるとリピーターが呼べるし、滞在時間も伸びると一般的には言われています。分かりやすい話でいうと、山形はそばが有名ですが、新築で建てたばかりの道の駅でそばを食べると地域の老舗でそばを食べるとでは、どちらにリピーターが生まれて、友達連れて行こうと思えますか。絶対老舗ですよ。道の駅はたまたまそこで食べられてラッキーだと、それだけです。だか

なぜ「エコロジーガーデン」なのか？

- ➡ エコロジーガーデンには既に多数のリピーターが存在
- ➡ ソフト=物販(産直)、多数のイベント
- ➡ イベント時以外の来訪者の滞在時間は？
- ➡ Café が開店 / ソフトの充実
 - ➡ エコロジーガーデンのCaféはなぜ流行る？
 - ➡ 施設に歴史と緑があり魅力的だから
 - ➡ さらに滞在時間を延ばせるのでは？

なぜ「歴史まちづくり法」なのか？

- 新庄市の歴史・文化は新庄祭りで十分？？？
- ➡ 祭りの見学者は再度訪問してくれるか？
 - ➡ 祭りはソフトに過ぎないのでは？
 - ※ 風景(ハード) + 営み(ソフト) ➡ 向上

ら、道の駅は拠点施設であって名産品もありますが、滞在時間は短く、リピーターもそんなに呼べない。その観点でエコロジーガーデンを少し見直してみると、なぜエコロジーガーデンなのかが見えてきます。

もう一つ、歴史文化は新庄まつりで十分じゃないかという考え方についてですが、結構新庄まつりは面白いから何度か来る人もいるでしょうが、リピーターになってくれるかという微妙ではないでしょうか。昨日も言ったのですが、よそ者の立場で言うんですね、市民が盛り上がりすぎていて引いちゃうっていうか、ちょっと仲間に入れられないって感じですね、すごいとは思いますが、2度来るかとなると微妙じゃないかと思っています。むしろ、祭に来た人が祭じゃない時も新庄を訪れてみたい、となるべきです。逆でも良く、普段新庄のエコロジーガーデンに来てみて、まつりもすごいから来てね、というのでいい。とにかく何度か同じ新庄市に来てくれないと意味がないのです。祭はソフトであって、それが開催される「新庄市」という場所が大事で、祭ではない時にもこういう楽しさがある、というのがあと二度来てくれるわけです。そこを考えないといけません。

そして、先ほど言ったように、エコロジーガーデンはもうすでに多数のリピーターがいて、他県ナンバーの車も停まっています。新庄市でリピーターが来ている施設はそうそうないですよ。ソフトも産直があって、キトキトマルシェなどのイベントがあって、充実しています。さらに、イベント時以外は滞在時間が短かったけれども、アオムシさんがカフェを開いてくれて滞在時間も伸びています。そして今回、こういうイベントホールができてそれが目的で来る人が出てきますから、この人たちも滞在時間は長くなります。現に今日も、私のつまらない話を聞いているだけで滞在時間が伸びているわけですね。こうやって、長い時間ここに人が増えると、ちょっとお茶でも飲んで帰ろうかということになり、ますますお金が落ちるし、滞在時間もさらに伸びていくわけです。今後もそういう人たちに何度も来ていただけるようにするため、さらに手を入れていく必要があるのです。

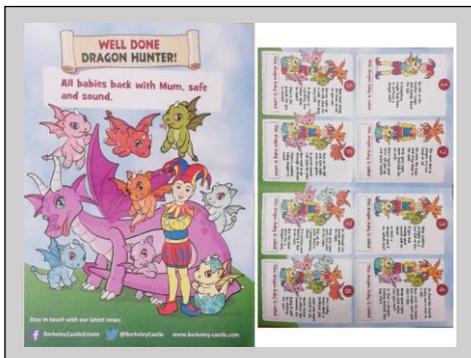
もう一つ大事なことは、エコロジーガーデンがなぜやっているのかということ。アオムシさんなどコンテンツが良いというのがありますが、やっぱり場所が良いのです。アオムシさんの出しているものが良くて、なおかつこの雰囲気があるからこそ何度も来てくれているのです。ですから、空間とコンテンツの両方がそろって人が来てくれているわけであり、これらがつまらなかったら、リピーターは生まれません。雰囲気が良くて、その中にカフェがあっておいしいもの食べられるから、友達連れて来てみよう、東京から友達が来たならエコロジーガーデンに連れて行ってカフェでお茶飲みながら風景楽しもうか、という気になるのです。



施設に歴史があって風景も魅力的、コンテンツもそろっているから来なくなる。先ほど言ったように、周辺に霊屋や寺町、川がありますし、まだ使い切っていない大きな緑地も残っている。これらを使い切ることで、そんなに大金かけずにもっと滞在時間を延ばしていくことができるわけです。ここからは、エコロジーガーデンのライバルとまでは言いませんけども、イギリスのナショナルトラストという所が持っているプロパティ（※資産、物件）を紹介します。ナショナルトラストは庭園や貴族の邸宅などの保存をしている有名な団体で、スライドはそのなかでも最もお客さんを集めている施設の一つ、ストーヘッド（STOUR-HEAD）という、ロンドンから車で3時間くらいにある大きなところですよ。ここが人気のある理由はいくつもありまして、歴史遺産も沢山ありますが、一部新築の施設があり、何かエコロジーガーデンに似ていますが、そのカフェレストランでは、無農薬の農産品を使ったものが食べられます。また、大きな庭園がありますから、ガーデニングのショップがあり、ガーデニング講座も開いています。近くにはファームショップということで、産直まゆの郷じゃないですけども、有機野菜、ナショナルトラストのプロパティで作られた無農薬野菜などを売っています。歴史文化遺産だけでなく、カフェなりガーデニングなり産直なりがあり、どこかでやっていることと一緒にですが、それが魅力でみん

なが何度も何度も足を運んでくれているわけです。

ストーヘッドの写真は20年位前のものですが、こちらは、つい2～3年前にイギリスに行った時の写真です。これイングリッシュヘリテイジっていう、イギリスの文化庁にあたるような組織が所有しているプロパティです。街にいとペットを自由にのびのびさせられる場所が無かったりしますが、ペットを連れてくつろぎに来て、カフェで買ったものを食べながらペットと遊んでいる風景です。それともうひとつ、子供がロールプレイってって昔の衣装みたいなのを着て遊んでいるのですが、実はおじいちゃんおばあちゃんが、孫を連れて来ているのです。それで、ずっと孫の相手をしていると大変なので、スタッフが孫の世話をしてくれる。ロールプレイなどをプロパティの人がやってくれて、おじいちゃんおばあちゃんは何をやっているかという、カフェでお茶を飲んでいる。孫を一定の時間遊ばせて、というか学ばせてくれるのです。例えば着ている服は、このプロパティと関係するような衣装で、遊びではあるけれども勉強できるというところ。一般に男の子は虫とかの動物が好きで、女の子はお花が好きなのですが、文化財の中にある植物とか虫とかも学ぶことができ、そのスタッフが面倒みてくれる。こんな仕組みになっているわけです。そしてこうやって滞在時間が伸びていく。さらに、親は土日の子供の相手をしていると疲れ果ててしまうのでターゲットを祖父母と孫にしていますが、祖父母と孫と一緒にいやいやついでくともあり、3世代で来ると割り引きがあったりもします。



またパークレイキャッスルという所では、「WELCOME TO OUR DRAGON HUNT」という、ポケモン GO みたいな遊びを準備しています。いろいろな場所を回ってドラゴンを見つけましょう、みたいな内容です。見つけると賞品が貰えたりしますが、実はこのドラゴンがいる場所というのが、このお城の中で子供に見て学んでほしい場所になっています。教育プログラムも潜ませてやっているということで、滞在時間を延ばすだけでなく、きちんと歴史文化の学びにも配慮したプログラムを作っている。向うの学芸員さんはこういうことにもものすごく一生懸命です。ただ勉強しようと難しいことを言っても子供は学んでくれませんから、遊び感覚で自然に学べるように工夫しています。おじいちゃん

おばあちゃんは子供を連れて来て、あとは学芸員さんに任せておけばいいわけですから、とても気の利いた施設になっているわけです。

さらに滞在時間を延ばす別の事例を紹介します。アメリカに、フランク・ロイド・ライトという、ものすごく著名な建築家のアトリエがあるのですが、ここは何と、ガイド付きじゃないと施設の見学ができません。お金かけて整備しても自由に見せない、これが重要なのです。どういう仕組みかというと、アトリエにあったガレージを改修したところに、ショップとカフェがあり、まずそこで受付をします。20分に1回くらい、建物の中のツアーがスタートしますので、まあ10分くらい待つわけです。待っている間にももちろんお茶してもいいのですが、大概の人はケチですか



ら、お茶も飲まず、ショップにあるグッズを見て歩いているわけですね。私もショップの中を歩いてグッズを見ていました。そして時間になるとスタッフが来て、アトリエの中を案内してくれるのですが、すごいのはですね、店内で売っていたグッズがアトリエの中にあるんですよ。そしてそれを説明してくれるのです。このグッズはどういう意味があって、こういうデザインで…と。それで戻ってくると、もう一回売っているグッズを目にするわけです。すると買いたくなっちゃうんですよ。待たせておいて買わせる。すごいテクニックというか、仕組みができて上がっています。こういう工夫をアメリカではものすごく細やかにやっています。今日は写真持ってきていませんが、スミソニアン博物館のショップは大人用と子供用に分かれています。大人用は非常にマニアックかつ高価なもの売っています。それこそ本物のアンモナイトの化石とか売っているわけですね。子供用の方は、子供が遊べるもの。子供がわいわいしながら買うものと、大人が趣味に興じて大金払ってくれるものとは全然違いますよね。そういうことを考えると、エコロジーガーデンに来るといつも思うのですが、産直の売り場もそろそろ分けた方がいいように思います。毎日とれる野菜など入れ替えの早い商品と、嗜好性の高い商品のコーナーを分けるなどすれば、さらに発展できるのではないかと思います。そういうことに向けて踏み出せるのが歴史まちづくり法です。ソフトとハードもそうですけども、お互いにいろんなことを組み合わせさせて効果を上げていくのを、「SYNERGY EFFECT (シナジーエフェクト・相乗効果)」と言い、シナジーを生むということが、いろいろな施設のキーワードになっています。そして、新庄でこれが生み出せる数少ない場所が、エコロジーガーデンであって、すごい場所なんじゃないでしょうか、ということです。

1-1) 歴史まちづくり法の意義: 規制から計画へ

文化財保護法: 伝統的建造物群保存地区
 条例による保存活用計画／重要な地区を国が選定
 市町村による保存活用を国が支援／地区内の行為の制限

景観法: 景観計画区域、景観地区
 条例による景観計画
 市町村に景観に対する規制の根拠を与える

歴史まちづくり法 : 重点区域
 市町村による歴史風致維持向上計画策定／国の認定
 市町村の計画に沿った維持向上の実行を国が支援
 ※ 歴史的風致形成建造物への規制
 計画の進捗に関する評価

1-2) 歴史まちづくり法の意義: 国の法定計画

◆ 地方自治体(市区町村)内部での優先度の確保
 ◆ 部局を越えた支援体制の確立への寄与
 ⇒ 法定「協議会」の活用 + 都道府県による支援

◇ 国が関与するその他の意義
 歴史的建築物・地区の保存に対するレベルを保つ
 国が支援をするための法的根拠
 ※ 国税の優遇措置／国の関与の度合いによる
 例) 重伝地区: 固定資産税の減免／家屋=非課税 土地1/2以内
 重要文化財: 固定資産税非課税／土地、家屋とも
 相続税の評価額の違い

ここからは少し真面目な話で、歴まち法の話をしていきます。私はいろいろな街で歴まち法に関する協力をしています。秋田県横手市とか、神奈川県小田原市とか、岐阜県郡上市とかでやっています。今回新庄市では会長をお願いされましたので、会長5つ目ですね。川越でも委員はやっていますし、岐阜の高山では5年毎に外部評価することになっていて、その委員をやっています。また、歴まちの導入前とか導入後に講演をしたり、長野市や千曲市など、街並保存で関わりのあった自治体が歴まちをはじめたところもあります。歴まち法の良いところは、具体的に新庄市で言えば、このエコロジーガーデンに更に手を加えたりすることに役立つわけですが、それだけではありません。文化財保護法とか景観法というのは、残念ながら「規制」の法律です。あれをやってはいけない、これをやってはいけないという内容であり、こういうことをやりたいから応援して欲しいということには、なかなか対応できません。それに対して歴まち法は、市が計画に位置付けてやりたいと考えていることを国が支援してくれます。こんな法律はなかなかないです。認定を取るまで少しハードルはありますが、何とか上手く計画をまとめ、市がやりたいことを実現していくということが大事になります。さらに、国の法定計画にもとづいて実施するため、自治体の中での実施優先度を確保しやすくなるほか、法定協議会における検討を通し、部局を超える支援体制が生まれます。

歴まち法は国土交通省と文部科学省、そして農林水産省の3省の承認が必要になるので、いろんな部局が協力しないと、計画が作れないからです。歴史まちづくりという名のもとに、いろいろな部局が同じ土俵で話し合いをしなければならず、縦割りが打破できるんですね。実際に私が関係している小田原市では、このことに関してとても良い効果が生まれています。国が関与する意義としては、歴史保存だ、文化を大切にしていると言いながら、とんでもない事業を行う事例も良く見うけら

れるのに対し、そうしたものは承認されませんので一定のレベルが保たれる点が重要です。そして、国が関与しているからこそ国のお金が出ますし、税制優遇は今の歴まち法の中ではありませんが、将来的にはそういうこともあるかもしれません。

**2-1) 歴史まちづくり法の効果
歴史まちづくり協議会の活用**

神奈川県小田原市の場合

協議会メンバー＝市の関連部局、市民代表、学識者十員

※関連部局＝都市計画、文化財、教育、観光、産業振興、文化、財政、企画他

⇒ 重点区域内で歴史的風致維持向上計画に位置付けた事業一覧表＋進行スケジュール表

＋ 重点区域内で各部局が行っている事業の一覧表

＋ 重点区域内で各部局が把握している市民活動の一覧表

⇒ 区域内での事業と市民活動のレビュー

※ 縦割りになりがちな事業・活動への相互関連性の意識醸成

小田原のケースを具体的にお話すると、先ほど述べた法定協議会に都市計画と文化財だけでなく、教育、観光、産業振興、文化、財政、企画などの部局が、全員が同じ認識を持って関わっています。そして、一般的に作ることになっている重点区域内で位置付けた事業の一覧表とスケジュール表に関し、市独自に、エリアに位置付けたところで市が実施する事業を、歴まち以外の物も全て並べて作っています。すると、知らなかった互いの部局の事業を見ることになって、その後は話し合いながら実施するようになり、効率的に物事が進むようになっています。加えて、各部局が把握している区域内での市民活動も並べています。やはり、こんなことをお互いやっていたのかと、知らないところが沢山

できます。そうすると産業観光部局の市民団体と文化財部局の市民団体とを引き合わせて、一緒に何か企画してもらうことによって全く新しい動きとなり、バラバラだったものが一体的に動けるようになります。区域内での市の事業と市民活動をレビューすることで、縦割行政が打破できたわけです。こういう意識を醸成できたことが大きな成果になっています。

それから、この計画を立てるときに歴史的風致というものを検討、文章化しなくてはいけないのですが、小田原の場合、これが地域ブランドの醸成にも役立ちました。小田原では何かというと小田原城が出てくるのですが、小田原市の人が言う小田原城は、戦国時代の北条氏のお城のことで、今新幹線から見えている小田原城は、江戸時代の天守を昭和になってから再建した天守です。北条氏の小田原城と近世の小田原城はぜんぜん結び付かない。また近代には、文化人や政治家などの著名人が、素晴らしい別荘をたくさん作っていて、それを小田原市は保存しています。しかしこれ、時代がばらばらでつながらない。新庄でも、お城とエコロジージャーデン、これをつなげて考えている人がどれだけいるかという微妙ですね。戸澤家の霊屋もバラバラで考えていると思いますが、これではだめなんですね。そこを一気通貫して通すストーリーを考えなくてはならないということです。実は小田原の場合には、お城の整備は文化財部局が、街角博物館という施設の管理を商工観光課がやっていて、都市景観は都市計画で、と縦割りでバラバラです。これらの人たちが同じ方向性で同じ目的のためにやるためのストーリーとして出てきたのは、「お城は中世からあったが、江戸時代に城下町として栄えたことで意外に職人が住むようになった。代表的には蒲鉾とか干物とか寄木細工だが、それだけじゃなくて大工とかいろいろな職人がいて、実は箱根の名建築の施工はほとんど小田原の人がやっていたりする」というものでした。そういうストーリーで中世から近代まで一気通貫で見ることによって、はじめて自分の街が持つ特性や良いところについて、違う見方ができたということであり、歴史文化の現代における役割や意義を再評価することができています。そういうところも、歴まちというのはすごく良いものです。さらに、なんと今では、そのストーリーを小田原の歴史とし、市民団体の人による歴史文化講習として、新人職員研修のメニューにするところまで行きました。小田原市の職員たるもの、小田原の歴史をしっかりと知って、誇りを持って仕事をすべしと、こういうことまでやられるようになりました。

もうひとつ、歴まち法に関して三重県亀山市の事例を紹介します。亀山市はエリアが広く、旧東海道が走っています。実は亀山市には国の重要文化財がなく、関宿という宿場町が伝統的建造物群保存地区という国の選定になっているだけです。しかし亀山城というのが中心の街であり、市は歴まちでここを何とかしたいと考えましたが、国選定である関宿とは離れている。でも何とかやりたいことを実現したいということで、すごいですね、東海道全部線引きして、関宿と亀山城、城下を広げて、これを一つの重点区域としています。街道でつながっていれば一つであると。これでも国が認めてくれています。新庄も少し広めに考えたら良いのではないかと思います。勇気を持って臨みましょう。小田原とは少し違いますが、もてなしの文化と



称して、「街道でつながって東西交流をして、東海道の街道を支える文化は昔からあって今も生き続けている」などと文章化し、亀山城と関宿両方の事業を歴まちで進めました。関宿だけじゃなくて、亀山にある歴史的建造物やお城の櫓とかですね、いろいろなものを歴まちの整備で進めました。強引でもなんとかするという事例です。新庄市は、これと比べたら相当いけるんじゃないかということなのですが、関宿の例で最も参考にしたいのは、このエコロジーガーデンに何故力を入れるのかというのと似ているんですが、実は関宿は街並保存地区としてずっと整備を

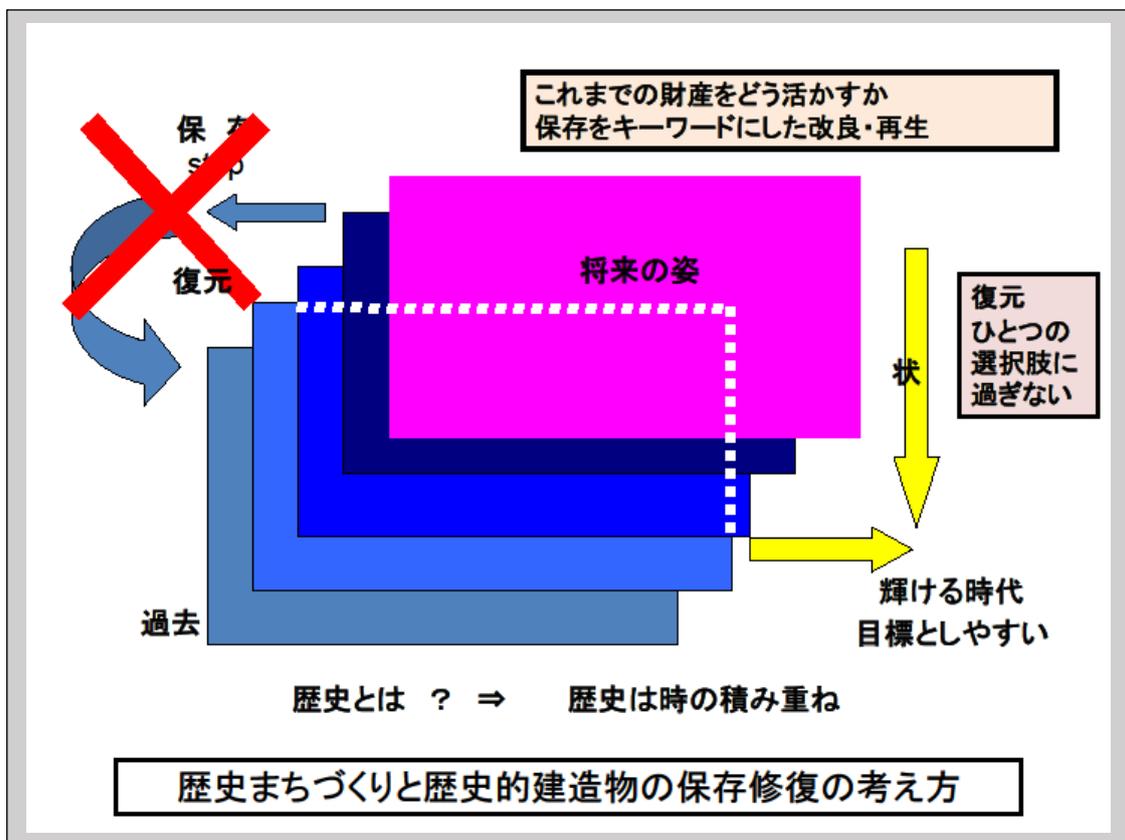
続けていました。しかし、いい街並なのにどうも人が来てくれない。ところがあるときバイパスが通って、バイパスの横、関宿の所に道の駅ができたのです。すると、ここに駐車する人が道の駅で買い物せず、作った側もそんな予測はしていなかったのですが、みんな関宿に行くようになってきました。関宿では滞在時間が伸び、お金も落ちることになりました。道の駅があればいいということではないですよ。普通道の駅に行って30分以上いることはめったにないですよ。駐車できるだけでなく、一定時間を過ごせる場所があるということがすごく大きいです。ここはそういう意味で、すごく人が集まってくる道の駅になっています。車で立ち寄りやすい場所に時間を過ごせる場所があるというのは大変強みです。新庄市の委託で、昨年大学でまとめた提案書で駐車場にも触れていますが、我々としては道の駅がどうかはいつでも良く、駐車場の作りようでもっと立ち寄りやすくなること、そこに車を停めて長い時間過ごしてくれる施設にできるのではないかと、そういうつもりで提案しています。



あとでそういうつもりで見直してもらえばのように読めると思いますが、まさに関宿はそうなっています。

関宿に一生懸命お金を投資したのになかなか賑わいにつながらず、街並保存賛成派と反対派が対立したりもしましたが、大きな駐車場ができて立ち寄りやすい形になった瞬間に、やっぱり街並保存して良かった、となりました。一つの駐車場が街を劇的に変えた。施設が変えたのではなく、魅力あるコンテンツがあるところに立ち寄れるようになった、ということなんですね。

最後に、「歴史まちづくりとは」ということなんですが、「新庄市の歴史と文化と過去のまちづくりを『再考・再評価』し、新たな歴史と文化を重ねる」とことなのではないか、ということです。古いものの維持だけでなく、関宿も大きな駐車場という新しい要素が必要だったわけで、それをちょっと加えただけで劇的に街が賑わい、元気になりました。そういう、足りないものを少し加えていくのが大事で、それが歴まち法で実現できるのです。その対象は、考えてみるとエコロジーガーデン以外にも、お城・羽州街道・霊屋をつないだり、新庄まつり・城下・農村、新庄市にとっての蚕糸業、雪・くらしとか、いろいろあると思いますので、歴まちの方で考えていただければと思います。私も会長ですので考えなければいけないのですが。



今我々が暮らしている街は、上の図のように過去から現代までの時間の積み重ねでできています。それで、過去のものが見えたり、新しいものが見えたりして、我々にはこういう風に見えるのですが、20世紀まではどうやっていたかという、過去を否定して上にものを重ねていたと思いませんか？昔のものはだめだ、うちの街は何もないと。こうやって隠そう隠そうと、もしかすると下の物を全部なくして、新しいページにしようとしていたのが20世紀だと思うのです。文化財に関しては何をやってたかという、ここに規制をかけてストップさせ、昔の格好を復元しようというのをやっていました。私はどちらも間違っていると思うんですね。過去を否定して新しいものを作るのも間違いだけれども、復元するのも間違いだと思います。時代は止めても仕方がなく、新しいものは、さっきの関宿じゃないですけれども必要です。将来の姿を重ねるときに、目標とすべき輝いていた時代はどこの街にもあるんですよ。大事なことは、その輝いていた時代の姿を隠すのではなく、重ねたときに透けて見えるようなイメージで、ちょっと可視化できるようにするくらいの手を入れてあげて、新しいページも加える。これが大

事なんじゃないかということです。エコロジーガーデンがやっているのはまさにそういうことですね。古い施設を活かしながら、でも新しい手を加えて、新しい活動をやって、その両方がそろることによって元気になっていく。つまり、復元っていうのは一つの選択肢であり、昔を見えやすくする手段に過ぎないということです。これまでの財産をどう生かして、保存をキーワードにした改良再生を加えていく、これがまさに我々が21世紀にやらなければならないまちづくりではないかと思うわけですね。20世紀の社会は高度成長でしたが、21世紀には高度成長はもうありません。成熟してしまっています。そういうときに20世紀のような過去の否定や、スクラップ&ビルドといった更新型から、過去を評価してうまい具合にちょっとだけ新しい要素を加えるやり方、これを保全型と呼ぶべきだと思っているのですが、こういう時代が変わっているのではないかということです。保全型というとちょっと硬いので言い換えると、トヨタがこれを「カイゼン」と言っています。部分更新とか付加とかですね、いろいろ言い方はあると思います。この会場も新しい鉄骨が入ったり、空調機が入ったりしていますが、こういうちょっとした新しい要素が加わることにより、劇的に雰囲気良くなるわけです。

経済や産業の視点で 歴史・文化を見直す

◇経済・産業における成功の歴史
地域の資源を有効に活用する
資源の新しい利用方法を見つける

歴史・文化＝先人が残した地域の資源
自然＝地域の資源そのもの

最後に、経済産業の視点で歴史文化を見直してみようということなのですが、経済史や産業史の教科書などを見ると、成功事例がたくさん載っていて、それを習うのですが、必ず共通するキーワードがあります。それは全て、地域の資源を有効に活用したり、その資源の新しい利用方法を見つけたりしたとき、それが新産業に結び付いているということです。地域の資源というと、多くの人が鉱物とか石油とか、そんなことばかり考えがちですが、古い建物も同じなのです。お祭りだってそうです。歴史文化というのは先人が残した地域の資源そのものだし、自然物もそうです。自然物の方はみんな気づきやすいですが、日本人で歴史文化が資源だと思っている人は少ないですね。この歴史文化を、鉱物など天然

由来の資源と同様に資源と考えて、有効活用の方法や新しい利用方法を見つけること、これがまさに21世紀に必要なことなのではないかと思います。

ということで、非常に雑ばな話でしたが、私の話はこれにて終了します。ご清聴ありがとうございました。

